

# 終助詞「よ」「ね」「よね」の談話機能：中国人日本語学習者を対象とする指導法の開発に向けて

顔, 暁冬

<https://hdl.handle.net/2324/1398296>

---

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



日本語の終助詞、取り分け談話における「よ」「ね」の機能に関する研究は、今日まで盛んに行われてきた。しかし、これらの研究の多くは言語分析のみを目的としており、日本語教育への応用にまで繋げようとしているものは少ない。そこで本研究では、談話分析という手法を取り入れながら、談話における「よ」「ね」「よね」の用法を、効率的に中国人日本語学習者に指導するための指導法を提示することを研究目的とした。

まず、自ら収集した日本語母語話者のインタビュー会話のデータを用いて、高頻度で使用されている終助詞「よ」「ね」「よね」の用法を分析することで、その談話機能を明らかにした。次に、中国人日本語学習者のロールプレイにおける終助詞「よ」「ね」「よね」の使用に見られる問題点を抽出した。更に、中国の日本語教育現場で使われている日本語教科書の問題点を抽出し、中国人日本語学習者の問題点を勘案した上で、改善の方策を提案した。最後に映像教材を利用した実際の教室活動を行うことで、本研究の有効性を実証的に示した。

第1章から第3章では、本研究の目的を述べ、先行研究を概観し、研究方法について述べた。

第4章では、終助詞「よ」の談話機能を考察した。終助詞「よ」の使用率は9%であるが、年代（年上>年下）・性別（男>女）による差異が明確に現れた。談話データを分析した上で、終助詞「よ」の本質的な談話機能を「話し手の認識の優位性を指標するマーカーである」と定めた。「情報縄張り」「待遇性」の観点から、典型的には話し手の縄張り内情報を提示すること、「のだ」+「よ」が高い割合を占めること、聞き手の縄張り内情報には使われにくいこと、「会話管理」の観点からは、「あいづち」が高い割合で後続していることを示した。

第5章では、終助詞「ね」の談話機能を考察した。終助詞「ね」の出現率は32%と高いが、年代・性別による使用差異は明確には現れなかった。談話データを考察した上で、終助詞「ね」の本質的な談話機能を「聞き手に認識の共有性を確認するマーカーである」と定めた。「情報縄張り」「待遇性」という観点からは、「ね」は聞き手の縄張り内情報に対する確認を求めるものが典型的であること、「のだ」+「ね」は8%と低い割合であること、待遇的には聞き手との一体感を作り出すのに使われていること、「あいづち」の後続の割合は低いことが明らかになった。さらに、間投助詞の「ね」や非文末「ですね」の談話機能を明らかにした。

第6章では、終助詞「よね」の談話機能を考察した。終助詞「よね」の使用頻度は、総発話中7.5%の出現率であった。談話データを考察した上で、終助詞「よね」の本質的な談話機能を「話し手の認識を聞き手に提示し、聞き手から共感を求めようとするマーカーである」と定めた。「情報縄張り」「待遇性」については、「よ」とは異なり聞き手の縄張り内情報であっても話し手の認識の真偽を聞き手に確認することによって共感領域を作り出しながら失礼にならずに使われうること、「会話管理」の観点からは、「話者交代あり」が66%と非常に高いこと、さらに「よね」が使用されると話題転換が起こることが多いこ

とが明らかになった。

第7章では、教育の現場に活用するために、終助詞「よ」「ね」「よね」の談話機能を対照させた。まず、「情報縄張り」という観点から、夫々の終助詞を話し手縄張り内情報、聞き手縄張り内情報に対して使用される割合について対照させた。また、「待遇性」との関わりについては、夫々の終助詞が失礼になりやすい場合について明らかにした。最後に、「会話管理」の面から、話者交代、相槌挿入の割合などについて対照を行い、学習者への教授内容について考察した。

第8章では、中国の大学生にロール・プレイをさせて、終助詞の使用実態を調査した。分析の結果、「よ」の使用率が15.8%と日本人より高いのに対し、「ね」の使用率は12.3%と低く、さらに「よね」は0.1%と殆ど使われていないという使用概況が明らかになった。また、「情報縄張り」「待遇性」「会話管理」についても不適切な使用が数多く確認された。最後に、これらの分析結果を基にして、「情報縄張り」「待遇性」「会話管理」の夫々について重点的に教授すべき内容を明らかにした。

第9章では、前章までの考察を踏まえて、重点的に教授する必要があると考えられる終助詞「よ」「ね」「よね」の用法を映像教材を利用して教授する方法を案出し、実際の教室活動を行った後、その効果について論じた。第10章では、本研究をまとめ、今後の課題について述べた。